

日本に根を下ろし50年

医療者・患者に寄り添い 超高齢社会の医療を支える

地域に根ざした外資系企業として宮崎県に透析液の自社工場を構え、高い医療スタンダードを追求してきたバクスター。日本法人設立50周年を迎えた同社のダニー・リスバーク代表取締役社長に片桐圭子本誌編集長がインタビュー。同社の軌跡や日本の医療ニーズに応える姿勢、多様な働き方、今後の展望を聞いた。

人工透析を中心に、日本の医療ニーズに応えてきた歴史

片桐 まずは日本法人設立50周年、おめでとうございます。私が御社を知ったのは社人になった1992年でしたが、その時点ですでに四半世紀近く、日本でビジネスをされていたことになりました。これまでの軌跡をお聞かせください。

不全のための腎代替療法の一つ、血液透析が保険適用となった時期です。透析器や臨床検査機器などへの高まる社会ニーズに合わせるべく日本市場に参入。法人を設立したのが69年です。82年には日本で初めて腹膜透析の薬事承認を取得、在宅での透析が可能になりました。

片桐 併せて患者さん向けのコミュニケーション誌を発行したり、機器サポートを行う24時間コールセンターを設置したりされ



ダニー・リスバーク Danny Risberg

バクスター株式会社 代表取締役社長
1962年生まれ。米国で生まれ育つ、多国籍企業の日本法人で会長兼CEOとしてヘルスケアテクノロジー、消費財、照明などの事業分野を統括した後、2018年9月から現職。30年にわたり日本で暮らし、日本語に堪能。釣りと車の運転が趣味。米国医療機器・IVD工業会理事。

ていますね。
リスバーク それらも含めて、患者さんの在宅医療を支えるパイオニアだと自負しています。近年は腎代替療法のリーディングカンパニーとしての地位を確立し、さらに手術前後の周術期医療領域や血液浄化領域にも、革新的な医薬品や技術を導入しています。「患者さんの生命を守る」という創立以来のミッションに50年間コミットし続けていることを誇りに思い、この先の50年も日本のヘルスケアの二翼を担っていきたく願っています。

片桐 在宅でできる腹膜透析は、通院が必要な血液透析に比べると普及があまり進んでいません。なぜなのでしょう。

リスバーク 日本では血液透析の普及率が約97%なのに対し、腹膜透析は約3%に過ぎません。これは海外の先進国と比べても低い数字です。理由としてよく挙がるのは医療者への啓発・教育が十分に行きわたっていないことや、自分で治療することへの患者さんの不安感などです。末期腎不全の治療においては、医療者と患者さんが十分に話し合って症状やライフスタイルに合う治療法と一緒に決定する「シェアード・デシジョン・メイキング（SDM：協働する意思決定）」が注目を集めています。当社としては日本の患者さんや医療環境ニーズに特化した製品を届けるとともに、より良い選択の一助となるよう、治療選択の適切な情報の提供を続けています。

宮崎の自社工場で雇用を創出し、成長の場も提供

片桐 それにしても外資系企業の中ではかなり早い日本市場参入です。当時はハードルの高いチャレンジだったのでは。

リスバーク 日本の透析ニーズの高まりは見逃せぬものでしたし、当時から潜在能力の高い市場でもありました。スムーズな参入のために、当初は日本企業との合弁会社として設立しています。

片桐 米国創業のグローバル企業ながら、日本に特化した製品開発や、宮崎県に90年から工場を構えるなど、しっかりと根を張っているイメージです。日本との向き合い方を教えてください。

リスバーク グローバル企業として、どの国においてもそれぞれの地域社会にコミットし、各国のヘルスケアシステムに貢献することを哲学にしています。特に腹膜透析は毎日行う治療法です。厳しい品質基準を満たし安定供給するためにも、国内に工場を設置する必要があり、透析液に使う良質な水に恵まれた宮崎県を選びました。

片桐 日本法人の社員数が約700人、そのうち宮崎工場に約300人がいらつしやると伺っております。

リスバーク 国内拠点の設置は、近隣地域の雇用創出にも貢献できます。宮崎工場も県内外から集まった人々が長いキャリアを築き、成長する場所になっているのが本当にうれしいです。

片桐 社内には勤続42年の方がいるとのこと。それだけ長期にわたり外資系企業でキャリアを構築される方は少ないのではないかと思います。

リスバーク 世界で信頼を得たイノベーションを日本の医療ニーズに合わせて提供する。そして日本社会と調和しながら、人材の成長と持続可能性に企業として貢献する。この二つが当社が半世紀をかけて実行してきたことであり、これからも変わらないうところですね。

多様な人材が企業を強くする 柔軟な仕事環境で成長を後押し

片桐 御社は、「もともと働きがいのある職場」という目標も掲げているそうですね。どのような取り組みをされているのでしょうか。

リスバーク 長く働いている人がいるというのは即ち、豊かな知見が蓄えられているということですね。それらを大切にしながら、新しい考えも積極的に採り入れていきます。年齢も経験もバックグラウンドも多様な人々を内包することが、ビジネスの成長力をさらに強いのにもついでに、私たちが多様な人々をひとつにするのが、私たちのミッションの実現には必須です。私たちの仕事ができるように貢献できるのかを学ぶため、患者さんのお話を伺う社内講演会なども実施しています。そして多様性に即した働き方を推進するために、在宅勤務やフレックスタイムなどの仕組みも早い時期から導入しています。さらに医療のソリューションパートナーとして高い専門性が求められるMRやクリニカルコーディネーターといった職種は、ホームオフィス制を採用しています。通勤に時間を使わずに仕事に集中し、家族との時間も大切にワーク・ライフ・バランスを保つこともひとつの目的です。



片桐 圭子 Keiko Katagiri

AERA編集長

本の方は信頼を築く難しさを、失う怖さもよく理解されたうえで、相互信頼を育む文化を本場に大切にされています。と感じます。

片桐 日本の医療についてもよくご存じですが、世界に先駆けて超高齢社会が進んでいくこの国に、御社は今後どのように寄り添っていかれるのでしょうか。

これからも日本に届け続けるのは「より良く生きる」ための医療

片桐 リスバーク社長は日本に暮らして30年になるそうですね。

リスバーク 当社に来る前から日本に住んでいました。当社に招かれたとき、実はもう引退しようかと考えていたのです。でも世界的に評価が高く、信頼されている企業に声をかけてもらったことは光栄でしたし、再び社会の役に立てるのなら、この職を引き受けました。

片桐 私たち日本人についてどんな印象をお持ちですか？

リスバーク やると言ったことをやり抜く、その力の注ぎ方は他国と比べても特別ですね。そして一度築いた信頼関係が長きにわたって続いていく。日



日本の自然を愛するリスバーク社長。効率性と社会保障の両立という課題を抱えるこの国の医療のパートナーとして、バクスターは次の50年も寄り添っていきと語る

リスバーク 高齢社会はどついても医療財源を圧迫します。だからこそ価値の高い医療、効果効率の追求が期待されるのです。当社のイノベーションをもって、手術や急性期・回復期の医療の質の向上、命と暮らしをより良く支える治療法の普及に寄与すべく邁進を続けます。

片桐 御社がこの先も日本医療とともに在ること、心強く思います。ありがとうございます。

片桐圭子の編集後記

休みの日は海や溪流釣りに出かけるのが大好きというリスバーク社長。激務の合間をぬって毛針を自作されるのだと楽しそうにお話いただきました。シンブルで明快な英語の言葉遣いに、英語を母国語としない人材が集まるグローバル企業の文化を感じます。各国にしっかりと根を張って、患者さんの気持ちも大切にされる姿勢には共感します。社内外のコミュニケーションにも心を配るご様子に、温かいお人柄が表れていました。